

# スウェーデン 環境ニュース

最終号（2006年1月） ページ1/4

「スウェーデン環境ニュース」の発行を中止しました。予告なしのことでしたので、バックナンバーのすべてをホームページに載せると共に、発行の締めくくりとしてこの最終号をまとめることにしました。長い期間支えて下さった購読者の皆さんに、発行継続を断念した背景や自分にとってのニュースレターの意味などについて一度きちんとご説明したいと思ったからです。

## 狙いだっもの

「スウェーデン環境ニュース」という名前を付けてニュースレターを作ることを思いついた時のことを振り返ってみます。1996年の当時の私の母国スウェーデンは、あらゆる環境問題を包括的に解決していくために、社会のあり方そのものを変え、持続可能な社会を作ろうという建設的な方針を明確に打ち出していました。とても魅力的なことだと私は思いましたが、その取り組みが日本で紹介されることはほとんどありませんでした。この情報を日本語にして日本で伝えることによって、日本での議論を良いかたちで刺激したいと思いました。

## 出発点と方針だったもの

次は情報の伝え方や情報の選び方の方針を考えました。出発点は1996年11月の創刊号に載せましたが、それ以外は編集方針を余り紹介してこなかったので一度原点に戻り、説明したいと思います。創刊号より：

### 「わが国をエコロジー先進国に」 スウェーデン首相が方針表明

スウェーデンのヨーラン・パーション(Göran Persson)首相は、9月17日に国会で行った施政方針演説の中で「エコロジー的に持続可能な発展を実現する

ための取組みにおいて、わが国は将来、世界を動かす力をもった先進国となろう。エネルギー、水、各種原材料物資といった天然資源のより効率的な利用なくして、今後の社会の繁栄はあり得ないのである」と述べた。

同氏はスウェーデンの福祉制度を築き上げた政党「社民党」の党首で、記者らに対し「持続可能なエコロジー社会の建設を社民党の次期一大プロジェクトとしたい」と語り、さらに、スウェーデンが今後四半世紀のうちにエコロジー社会のモデル国になることも可能であるとの見通しを示した。

---

この記事当時の私は、スウェーデン生まれの環境教育団体、ナチュラル・ステップ(The Natural Step)の日本支部設立に注力をし、また同団体の設立者が書いた本(「ナチュラル・ステップ」、カール＝ヘンリク・ロベール(Karl-Henrik Robèrt)著/市河俊男訳、新評論、1996年)の翻訳者の相談役もしていました。ナチュラル・ステップの魅力はたくさんありますが、私が特に気に入ったのは「率先してスウェーデンを持続可能な国にしよう」という姿勢でした。ということで、私のニュースレターは、首相が正式に目指すとした「持続可能なスウェーデンに向けた、スウェーデン社会各界の取組み」をフォローし、報告することにしました。このためにニュースレターの上部に「環境国家を目指すスウェーデンを追う！」の一行を入れたのです。「スウェーデンの取組みを追求して私はがっかりするようになるのか。途中でネタ切れになるのか」と、実験の気分でした。

## 入手しやすくなった情報

一人で情報発信しようとするれば、本当に一人でできることは何かを考えないと無理です。まず東京にいなから十分な情報を入手できることが前提条件でした。インターネットが普及したので行政機関やメディア、環境保護団体などがホームページを設置し、多くの情報を提供する時代になっていました。インターネットのおかげで、それまでにはなかった情報の橋がスウェーデンと日本の間にかかったわけです。その情報には、東京にいる私がスウェーデンにいる人と同時にアクセスできるようになりました。加えて、環境保護

つづく

発行/編集：Lena Lindahl (レーナ・リンダル) 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話/ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

## スウェーデン環境ニュース

最終号（2006年1月） ページ2/4

1ページからつづく

団体の会報や専門誌を少し購読しました。新聞記事の切り抜きをしてくれる父も支えの一つでした。

スウェーデンは早くから英語でもインターネットを通じて情報発信してきたので、本当は多くの日本人も私と同じようにアクセスができたはずなのですが、言葉の壁があります。私は情報を探し、選別し、解説も少し加え、日本人がアクセスしやすいものに加工することにしました。

### 自立の基盤をつくるための 定期的発信

ニュースレターを始めたのはフリーとして独立して間もない頃でした。1995年当時東京にあったグローブ・インターナショナル（地球環境国際議員連盟）事務局の事務局長としての仕事を、日本人の総裁の任期終了を機会に退職し、フリーで仕事をすることにしました。日本社会は肩書きや所属を重視する社会ですので、まず自分の「看板」になるものを作る必要がありました。また、フリーになると仕事の関係者と会わなくなり仕事に来なくなる心配も少しあったので、定期的に発信するものがあれば自分の存在をつねにアピールすることができると思いました。

### 勉強するための原稿作り

スウェーデンの環境の取組みを日本で伝えて行くのが狙いでしたが、実際にはスウェーデンと余り関係のない仕事を数年続けていたので、スウェーデンの事情にそれほど詳しくありませんでした。情報を収集し、分析し、原稿を書くのは自分にとっての大切な勉強になりました。しかし、時間と労力がかかることなので、少しでも収入に結びつくのであれば継続しやすくなるを考え、有料にしました。ですから、購読者の皆さまから頂いた購読料は自分にとっては研究費みたいなものだと考えてきました。勉強を支援して頂いたことに対して感謝しています。

## 情報発信した結果

情報を発信しているうちに講演依頼が増えるようになりました。原稿執筆で得た知識を講演で伝えていくことになったので、新しい形で役立つようになりました。次に、「スウェーデンを視察に行くのでどこに行けばいいか」といった相談が増えました。その延長上で、視察をアレンジする仕事に発展し、通訳も必要だからと通訳の仕事も入るようになりました。しばらくすると、視察希望者は大体同じようなところに行きたがることに気がきました。これは日本語の情報によるものでしたが、常にスウェーデンの情報にアンテナを張っている私はずっと面白い、もっと進んでいるところがあることを知っていました。自分からより積極的に新しい視察先の提案をするようになりました。結局、自分で小さな視察旅行を企画することにもなりました。視察プログラムを組んだりしていると、それらは旅行だけではなく、実は教育プログラムのようなものだだんだん思うようになりました。そうするうちに、企画もガイドも通訳もしていると、その教育プログラムの仕組みまで頭が中々回らないことに不満を感じ始め、教育経験のある企画仲間が必要だと思うようになりました。

### 持続可能なスウェーデン協会 との出会い

次の視察旅行はどうすれば良いかを考えた時に、スウェーデン北部のウーメオ（Umeå）市に拠点を置く「持続可能なスウェーデン協会」（Sustainable Sweden Association）が主にアメリカ人を対象に開催するSustainable Sweden Tourを見付けました。プログラムの組立ては私の考え方とよく似ていました。その企画をしていたのは、環境教育の経験が豊富なエーサム株式会社（Esam AB）という小さなコンサルタント会社でした。2001年、エーサム社の設立者の一人であり、持続可能なスウェーデン協会会長であるトールビョーン・ラーティ（Torbjörn Lahti）さんが、ナチュラル・ステップ日本事務局の招待で来日することになりました。ナチュラル・ステップの設立に関わって  
つづく

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール） 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

## スウェーデン環境ニュース

最終号（2006年1月） ページ3/4

2 ページからつづく

た私は、彼の講演の通訳を務めることになりました。そしてそのついでに「日本語通訳を入れて日本人向けのツアーをやってみないか」と提案しました。そしてその何ヶ月か後に、最初の日本人向けの「持続可能なスウェーデン・ツアー」が17名の参加で成功に終わりました。これは2002年のことですが、この開始後、延べ80名の日本人がツアーに参加しています。現在、私も持続可能なスウェーデン協会のメンバーになり、日本代表として活動していますし、継続して年に2回程度のツアーを実施しています。

### ホームページを通じて出会う日本

講演が多くなるにつれ次第に顔も広くなり、その対応に少し困るようになりました。その解決策として1999年9月、個人ホームページを開設しました。2002年、最初の「持続可能なスウェーデン・ツアー」を企画した際、その宣伝をホームページに掲載することができ丁度良かったです。結局、インターネットを通じての参加者募集は予想外にうまくいったので、ホームページは旅行企画にかかせないものになりました。実は、ツアーの参加形態はインターネットの性質をよく表しています。私自身が拠点にしている東京からの参加者はそれほど多くなく、大半は日本各地から集まってきます。ホームページへのアクセスも、常に全国各地からですので、日本は距離のない国の姿をしています。外国からのアクセスもあります。実は、最初の旅行の最初の応募者は、日本人ではありませんでしたがオーストリア在住の方だったのでびっくりしました。

### スウェーデン環境法典

2003年3月、それまでのツアー案内を繰り返し送付していた多くの方のうち一人から、一通のメールが届きました。関東弁護士会連合会の公害対策・環境保全委員会の委員長からの問い合わせでした。スウェーデン環境省が作成したスウェーデン環境法典の英文か

ら作成した和訳を、スウェーデン語に対比しながらチェックし編集するという翻訳監修の仕事をして欲しいとのことでした。あまりにも難しそうで恐ろしい仕事だと感じたので、委員会の弁護士達に会って仕事を引き受ける姿勢に入ったのは10月でした。大変な仕事でしたが非常に勉強になりました。弁護士達がスウェーデンの法典事情を調査するための旅行も企画しましたし、2005年3月、その報告と法典の内容を紹介するシンポジウムの開催にも参加しました。自分にとっての非常に良い経験になったので有り難く思っています。このスウェーデン調査とシンポジウムの報告書は現在作成中です。

スウェーデン環境法典は1999年に施行されており、環境裁判所というスウェーデン独特の制度ができました。この改革が与える社会に対する影響も徐々に見えてきていますし、スウェーデンでもよく議論されます。施行以降、改正もされていますし、今後も改正が予定されています。その変化をフォローするのは中々大変ですが、スウェーデンの持続可能な社会を作る政策の骨組みであり、環境政策の中核にあるものですから、フォローしていくことに大きな意味があると感じています。これからの講演活動などで、より詳しく紹介していきたいと思っています。

### 発行中止へ

「スウェーデン環境ニュース」を実験の気分で出版させて以来、7年間作り続けた後にいま言えるのは、がっかりもしていないし、ネタ切れの心配も一度もなかったということです。逆に、良い情報が多く、フォローするのがだんだん大変になってきたということです。多様な分野から情報を収集し、一番興味深いものだけを選び、短く分かりやすい記事にまとめていくのはだんだん難しくなってきました。

また、長年支えて頂いた購読者の「ファンクラブ」はありましたが購読者数が一度に200を超えるようなことに中々ならず、媒体としての規模は割と安定していました。視察や通訳など、もっと収入と勉強の機会になる仕事が多くなってくると、ニュースレターに注ぐ労力とそれに伴う利益（収入と自分の理解・知識・能力）のアンバランスを感じるようになりました。労力対効果の効率が悪くなったと言えます。結局、旅行つづく

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール） 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

## スウェーデン環境ニュース

最終号（2006年1月） ページ4/4

3ページからつづく

を伴う仕事が多くなった時期に執筆が難しくなり、発行が止まってしまいました。

発行は中止したくなかったので決断は非常に遅れました。その間、ほかの仕事は順調に進んでいました。「スウェーデン環境ニュース」を出さなくても、自分の活動基盤がしっかりとできていることを実感できました。その意味で、私にとっての当初の目的を果たしたと言えます。自分としては、勉強はできたし、多くの情報をニュースレターや講演を通じて伝えることができました。フリーで仕事をするための基盤ができ、そこから多くの新しい仕事が生まれてきました。皆様から頂いた購読料は貴重な「研究費」になりました。それに合わせて自分が注いだ時間と労力、将来に向けての良い投資となりました。

### ハッピーエンド

現在、ちゃんとした方針をもって「定期的」に勉強することをしていません。少し残念ではあります。また、定期的に日本語で原稿を書くこともしていません。しかし勉強をやめてしまったわけではないし、別の仕事の形として原稿を書いたり情報発信したりすれば良いと思っています。自分の媒体を持つことは、活動基盤を作るため、そして、スウェーデンの進む経過をまとめて把握して表すためには重要でした。しかし今は、自分の媒体を持つよりも、より多くの人により効率よく情報を伝えることの方が重要だと思っています。

これまでインターネットを通じて情報を入手し伝えて来ましたが、視察に同行すると人の話を聞くことでしか知ることのできない、生の情報の大切さを感じます。文書になっていないところの人の考え、気持ち、哲学、動機付け、経験から得ている結論、知恵などです。進歩があまりにも早いので、情報は文書になっていくのに時間がかかります。そしてすぐに古くなったり、固くなったりします。ですからこれからの情報発信は、人のインタビューを中心にした方が良いと感じるようになりました。ニュースレターを始めた頃はた

まにしかスウェーデンに行けませんでした。今はスウェーデンによく行くようになったので、インターネットだけに頼る必要がなく、人と直接会って話を聞くことが可能です。

ということで、「スウェーデン環境ニュース」はその役割を果たし、次の段階へ進むための一つのステップになったと考えています。発行を継続して欲しいという嬉しいお声を頂いていますので、がっかりさせてしまうことは心苦しいのですが、自分としては結局ハッピーエンドとなったと思っています。

ホームページとメーリングリストを通じ、これからの私の活動を報告していきたいと思いますので、今後ともご支援よろしくお祈りします。

最後に、2001年以来、編集と、一時期は会員管理も手伝ってくれた土屋なおみさんにお礼を言いたいと思います。原稿はいつも最初から日本語で書いていましたが、スウェーデン人の私の言葉で通じない場合、スウェーデン語能力やスウェーデン社会に住んだ経験をもって私らしい表現をよく考えてくれました。原稿をメールで送ると必ず訂正入りの返事が来たので安心して頼りにできる仲間でした。この最終号も相変わらず彼女の協力で出来上がりました。

レーナ・リンダール

### 最終号に寄せて

私はコンサル会社勤めの職業柄か、法的縛りを意識した報告書作成に少なからぬ時間を費し、勢い文章は堅く無味無臭になりがちです。編集補助を始めた当初はニュースたるもの、特に環境という技術分野では主観を挟まぬ簡潔な文章であるべきと思っていました。しかしレーナさんとの協働で、ニュースにも丁寧語有り、主観有りという気付きがあり、彼女らしいスウェーデン人らしい感性を損なわず、ただし読み易い日本語への校正を心がけました。後者は私の力不足で読者の皆様にはご迷惑をおかけしたかとは思いますが、それでもこのニュースならではの宝物は受け取って頂けたのではないのでしょうか？私にとっては楽しい時間でした。また、スウェーデンで過ごし、そして彼女との協働で感じた最も大きなことは、とにかくネガティブに「対峙」しがちな環境問題を、淡々と、でもポジティブに一建設的という言葉が最も当てはまるのでしょうかー諦めることなど必要ないかのように、ライフワークの中に取り込んでいるところです。とりとめなく書きましたが、長らくのご愛読ありがとうございました。土屋なおみ

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール） 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>